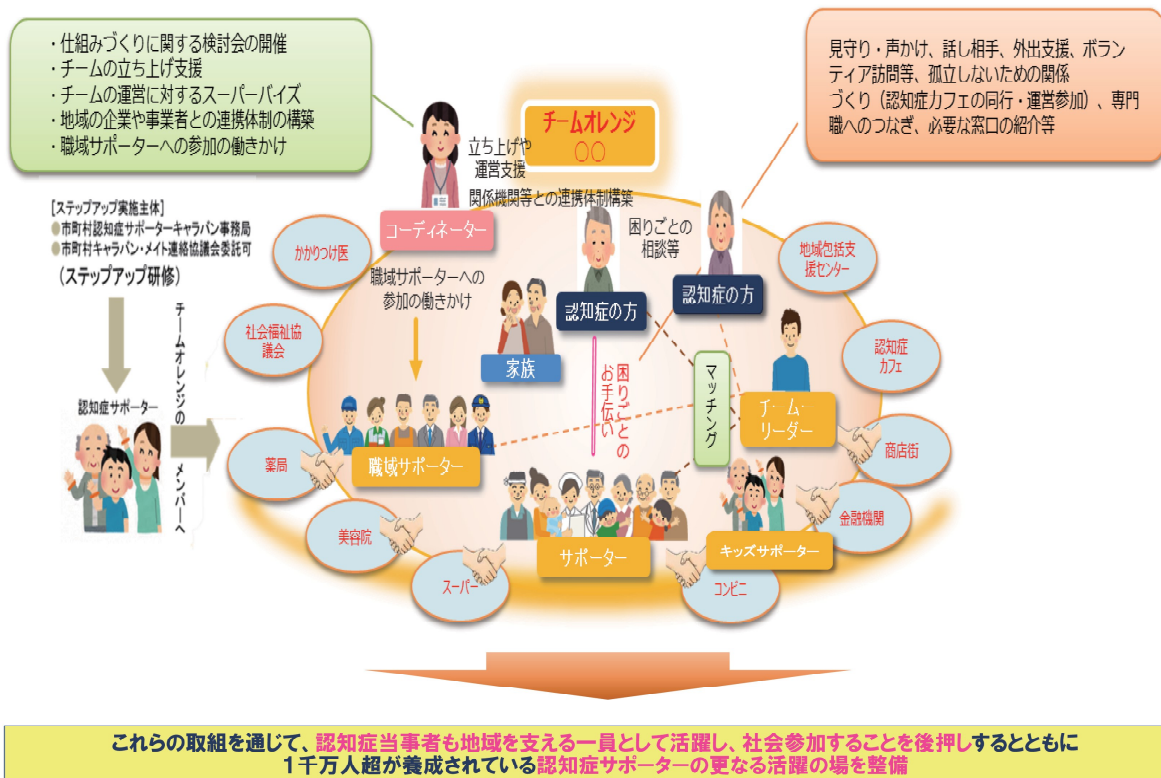


I. チームオレンジの構築を進めていくために

- ・ 市町村にコーディネーターを適宜配置し、認知症の方等の身近な困りごとを把握する
- ・ 市町村（コーディネーター）は、研修を通じてさらなるステップアップを図った認知症サポーターのチームを編成する
- ・ コーディネーター（チームリーダー）が把握したニーズとチームとのマッチングを実施する
- ・ チームによる外出支援、見守り・声かけ、話し相手、ボランティア訪問等、孤立しないための関係づくり（認知症カフェの同行・運営参加）等を実施する



(出典：令和元年9月2日付 厚生労働省令和2年度

認知症サポーター活動促進事業（チームオレンジ等について）)

(1) チームオレンジに求められる背景

認知症は誰もがなりうるものであり、家族や身近な方が認知症になることなどを含め、多くの方にとって身近なものとなっています。こうした中、認知症の方（以下、「本人」という。）を単に支えられる側と考えるのではなく、本人が認知症とともによりよく生きていくことができるよう、本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分ら

しく暮らし続けることができる社会の実現が求められています。その中で、チームオレンジは、本人や家族のニーズと認知症サポーターを中心としたチームメンバーをつなぐ仕組みであり、今後さらに高齢化の進展に伴い認知症の方の増加が見込まれる中において、その仕組みや具体的な活動が拡がることが期待されています。

(2) 認知症サポーターの活躍の場

現在、認知症サポーターは府内で65万人（令和元年12月末時点）を超えています。認知症サポーターは、認知症を正しく理解し偏見を持たず、本人や家族を温かく見守る応援者です。その認知症サポーターの中には、一歩進んで、地域の中でさらに貢献したいと思っている方がいます。こうした方々の活躍の場が求められており、認知症サポーターの活動の場づくりもチームオレンジの目的のひとつです。チームオレンジを進めるうえで、「認知症サポーターの活躍の場」や「拠点づくり」は、大きなポイントと言えます。

(3) 最も大切にすべきは本人

チームオレンジを進めるうえで最も大切にすべきは、本人ということには忘れてはいけません。本人の「したいこと」や「希望」、「夢」といった想いをまず把握し、それに向けて活動することがこの事業の原点であることを心のどこかにとどめておいてください。

また、「チームオレンジはこうあるべき」と決まった形がありません。地域や実情に応じて、さまざまなチームオレンジの形があることが自然であると思われれます。

(4) 今の事業からヒントになるものを探す

チームオレンジを進めていく中で、「どこから進めていったらいいのかわからない」と困ることもあるかと思いますが、新しいことを立ち上げるというよりも、まず「今の事業のなかで、チームオレンジにつながる活動がないか」探してみてください。今の事業にヒントがあるかもしれません。市町村の事業の中になくても、地域の取組の中でキラリと光るものがあるかも知れません。広い視点でさがすことが大切です。また、ヒントがみつければ、次に「どうすればチームオレンジにつながるのか」を考えていきましょう。

(5) できることから始めてみる

本人のニーズを受けてとめ、活動していくには多くの知識や経験、エネルギーが必要となります。自分の置かれている環境や状況をよくみて、できることから始めてみる。まずは、ひとりからでもいいので、その方とじっくりと関わってみては如何でしょうか。

何事も最初からうまくいくことはありません。本人との関わりの中で悩んだり、課題がでてきて当然ですし、課題や失敗も大切な経験です。焦らずにひとつずつ進め、経験を積み重ねていくことで、チームオレンジが地域に根付いていくことにつながるのではないのでしょうか。